

# 寄せ場での闘い

## パート2

### 日雇共斗から日雇全共へ

今うつされた二つの映画は、七〇年代前半、今から一〇年くらい前のちょうど釜ヶ崎での釜ヶ崎共斗会議の全盛時代で、かつ、爆発物取締り罰則違反、つまり爆取弾圧デッチ上げで、多くの釜共斗の仲間が弾圧をされ、組織的な解体状況に追い込まれる、そういう時期のフィルムでした。

今日、僕のほうから話をするのは、階級的な労働運動の旗を寄せ場ではじめて掲げた釜共斗・現斗が潰れて以降、どんな斗いをやってきて、八二年の、二年前の日雇全協結成に到ったのかという話になります。

それは、あんまりカッコのいい話でなくて、しかもあの釜共斗・現斗が潰れて以降、私の場合には寄せ場の運動に外から入ってきたということがありまして、一時期の釜共斗・現斗の運動の意味をしっかりと捉えられずに寄せ場の運動の冬の時代を担ってきたという意味では、非常に自己批判的に反省的に捉えざるをえないと思っています。したがって、できれば討論の中で鋭い質問を受けてですね、大いにいじめられながら、どんな誤りを犯したり、少なくともちょっとばかり意味があった斗いをやってきたのかというようになどを明らかにできればいいな、というふうに思っています。



宗 村 義 隆

渡したレジュメ(別掲資料3参照)ですけれども、年表みたいのがありますね、山谷、寿、釜ヶ崎、笹島の順序に書いてあって、現斗・釜共斗の解体が七四年とすれば、それ以後、どんな運動が行われてきたのかという概略が記されていると思います。私は、山谷で七五年ぐらいから七八年ぐらまでは支援でやっています、七九年から当該の土方になったという経過がありますので、主に山谷の事は詳しく話ができる。その他の寄せ場については、電話でいろいろ聞いたりしながら、若干討論して、特徴的な所をかなりデフォルメというか、特徴をゴジラ化するような形で書いてみたということです。

まず、日雇共斗から日雇全協の流れということですけど、資料の備考の所を見て下さい。七四年の越冬斗争を機にほとんど現斗・釜共斗は権力の集中弾圧——山谷の場合でしたら、年間二〇〇人以上にわたる警察の弾圧、釜ヶ崎の場合でも一五〇人を越える弾圧とそれから爆取デッチ上げ弾圧ということで解体をする。以降、そういう現斗・釜共斗との潮流とは別なところから、いろんな運動の試みが始まります。ただ、釜ヶ崎の場合には、釜共斗の中の行政班の部分が継続して斗いをくり広げていまして、釜ヶ崎の場合は継続性

があるわけですけれど、その他はほとんどありません。

例えば、「全国労働組合活動者会議(労活)」というのがあるんですけれど、それが七四年ぐらいから運動の支援というのを試みまして、いろんな動きをする中で七五年の五月一八日に寿日雇労働組合が結成される。笹島、名古屋の方では、当該が出てくるのが七八年の八月。それまでは、七六年あたりからは、名古屋駅からの青カン者に対する強制退去攻撃に対してキリスト者や闘う労働者——寄せ場以外の労働者——が、支援として運動をおこしてくる。山谷の場合にも、七七年の一月四日に山谷統一労働組合が結成され、七六年からS斗会というのがあったわけですけど、それが同じ七七年八月一五日に「山谷日雇労働者組合準備会」というものをつくる。

こういう流れの中で、七七年四月二七日に、「三里塚、狭山を闘う全国日雇共斗会議」というものが結成される。以降、日雇共斗の場合には、七八年の三里塚斗争、とくに三・二六斗争で、第八ゲートに突入部隊と行動を共にした部分が五二名、一般的なデモをやった部分が七〇名ぐらいで断固闘ったあと、寄せ場での運動をどうしていくのかということについて論議がおこる。つまり、日雇共斗というのは結成から一年くらいの間しかほとんどもたなかったというか。そのあとは、三里塚を闘うのはいいんだけど、寄せ場でもう闘ったらいのかという総括論議がほとんどです。

この時代は船本氏が、七五年の六月二五日、嘉手納基地の第二ゲート前で朝鮮侵略戦争開始の日、皇太子訪沖を糾弾するということが焼身決起をし、次の年七六年二月一六日に、鈴木国男氏が、大阪拘置所でコントミンの大量注射の中で虐殺される、という時期があります。七九年六月九日に磯江洋一さん(今、旭川の刑務所にいま

すが)がマンモス交番のポリを刺し殺すという卑身決起を行う中で、これまで現斗・釜共斗の運動を中心に担った人たちが寄せ場に戻ってくる。その部分と、日雇共斗をやった人たちが、七〇年代全体の寄せ場運動を総括して、八〇年代は本当に闘う寄せ場の団結をつくらにゃいかんのかなというような試みが開始されて、主要には釜ヶ崎、山谷で実践的に確かめられていくなかで、最後の全国結合への試みが開始されてくる。

八一年の八月に、「寄せ場交流会」というのがつくられて、これが名古屋の笹島、大阪の釜ヶ崎、横浜の寿町、東京の山谷、全国四大寄せ場の団結をもとに、約一〇ヶ月で七七波の全国斗争と、七回の会議を行い、八二年六月に日雇全協が結成される。以降、現在に至る。

とりわけ日雇全協結成のあと特徴的な斗いとしては、昨年一月から今年四月くらいまで斗われてきた国粋会系西戸組—皇誠会斗争というものがあげられるだろうと思います。そして今年の六月二四日に、日雇全協第二回大会が行われて、現在に至る。だいたいこういう流れとしておさえておいてもらいたいと思います。そこで、あんまりカッコよくないんですけど、大きく分けて日雇共斗から日雇全協の結成というふうに言うんですけど、①日雇共斗前史と、②日雇共斗の時代と、それから、③日雇共斗から寄せ場交流会に至る時期と、④交流会から日雇全協へ、そして⑤日雇全協の創立大会から二年間、というふうに今まで五つぐらいの段階に分かれるんじゃないかと思うので、そういう順序で簡単な総括視点というものを出してみたいと思います。

まず、釜共斗・現斗と明確にちがう潮流として、労活系の寄せ場

運動のテコ入れが七四年から行われます。これは、いわゆる山谷現斗委が解体して以降、梶大介という人が、七五年に炊き出しを始め、梶さんが労活の全国運営委員というのをやっていたという関係で、労活を軸に寄せ場の運動をつくらうという動きになります。特徴は、まず戦術面ですけども、極端なアブレ地獄、石油恐慌から全く仕事がないという時期で、仲間の命を守ること、炊き出しを寄せ場の運動の特徴にした。斗い方としては、行政に対する責任追求というやり方です。それから路線面といいますか、これはすぐ問題になってくるんですけども、若干、山谷労働者の生活などの悲惨さを売り物にする傾向といえますか、お助け的な救済主義的な傾向、あるいは、労働運動一般への寄せ場労働運動の解消ということが象徴的です。実際の組織運営では、支援が代行すると、山谷労働者の自前の起ち上りではなく支援が代わりにやると。そうすることによって、例えば寄せ場のしきたりと一般労働運動とのしきたりは違うわけで、労働者がそれに対して抗議を申し入れると、抑圧するというような形で、寄せ場労働者の自前の団結をも否定してしまふというような傾向であったと思います。

ですから、実際、七五年ぐらいから労活が全労交（「全国労働組合活動者交流会」）というのをやっていたんですけども——毎年八月ぐらいに——そこではかなり激烈な討論が行われました。まず、名古屋（その当時は支援だったんですけども）、東京は山自労、横浜、寿町は七五年のいわゆる「寿日雇労働者組合（寿日労）」結成以降、特に支援代行を批判して労働者の実力斗争方針を強調しています。

三回の交流会が名古屋と横浜と東京で行われたんですけども、そこではかなり集まって、いっしょにやるうやということは決まります

が、内容においては全然違ってくるという形で、交流はするけれども基本的な方向は決まらないというような状況でした。

寿町は、この当時、「わしら独自にやるわ」ということで、七五年に寿日労を五月に結成して以降、八月、一〇月、十一月と、仕事よこせで、寿町の職安とか、センターに対して実力斗争を展開します。これで、バンバン、パクラれるわけですね。バンバン、パクラれて、出てきてからもとにかく頑張るわけですね。一〇月、十一月、の連続した職安センター斗争のあと越冬斗争を受けて、七六年一月の一六日に総決起集会を持って、仲間の怒りが交番に向うわけですね。寿町の交番に対する三〇〇名での襲撃という斗争になりました。機動隊が八〇〇人来てブチャブチャに殴られて、主要幹部六名が逮捕されて、九ヶ月間の拘留を受けると、その中でひとり頭を盾でかち割られました、僕も見たんですけど、こう頭がはずれちゃってるんですね。川瀬さんという人なんですけども、その人が、三ヶ月間、昏睡状態に陥るほどのでたらめな弾圧の中で、こういう戦斗的な闘いが、権力の弾圧によって潰されるという状況をつくり出すすなわち、日雇共闘の前身は、寿町のいわゆる支援との対決、支援代行を糾弾して自前の闘いを展開するという闘いを主軸にして、主導力にして展開されたというふうにいえると思います。

山谷の場合には、梶大介さんの方から、私も支援で行って支援を除名されるんですけど、労働者が、例えばドヤの親父とケンカをする、そうすると、そのケンカしたことが悪いということで支援をしない、支援をしないという形になってしまっています、労働者がほとんどいなくなると、代わりに労活の人なり支援の人が会議を開いて方針を出して、それで運動していくというような形になる。かなり

運動的には、山谷も一時弱吹き出しなんかはかなりあるし、新聞沙汰にはなるんだけど、運動的にはほとんど見るべきものはない。

ただ、釜ヶ崎の場合には、独自に労働過程って言いますかね、「仕事よこせ期成同盟」なり、「釜ヶ崎日雇労働組合準備会」というところで労働相談なんか行いながら、そういう寿や山谷の運動とはちよっと違った、七〇年代後半で唯一寄せ場に根を張って運動をやり切れたところだろうと思います。

最終的にはですね、この日雇共斗前史の労活系の寄せ場交流会というのは解体するわけです。解体する時の論理というのが、分裂少数派組合運動というのがその頃、はやっていたわけですけども——今でも頑張っている人多いんですけども——寄せ場ってというのは労働者が集まらんと、だから中心的なメンバーが代行してやるしかないんだと。これは労働組合で斗う人間が孤立させられるのと同じだと。で、なんか、分裂少数派組合運動と寄せ場運動をダブらして、そうする中で支援代行を合理化するというような傾向とか、それからやっぱり、三里塚問題なんかグーッと煮つまってくるんで、三里塚斗争やらにいかんじやないかというようになことに対して、路線がちがうから私は共斗を断わる」と。あの時の言葉ですと、「私は不断に孤立を求めて生きていく」というようなところで、組合の山自労の会議そのものを中野の方で開くというようなことの中で、潰れていってしまう。

そういう中で、釜ヶ崎と寿の方から提起を受けて、「三里塚、狭山を斗う全国日雇共斗会議」というのが、七七年四月一七日に結成されます。この時期は、釜ヶ崎が主導的な力を発揮したというように言っておきます。情勢が情勢で、三里塚の空港着工攻撃や空港開

港攻撃が煮つまる。やっぱり、全体的に運動が盛り上がる中で、寄せ場も、三里塚斗争を斗わにいかんじやないかという感じで集まってきました。ただ、これは文字通り三里塚斗争をめぐる全国日雇共斗会議であって、寄せ場の労働運動の方針をめぐる結果ではないわけです。

寄せ場労働運動の基本方向をめぐる日雇共斗内の論議は、寿と山谷が日雇差別糾弾、日雇完全解放というような傾向に対して、釜ヶ崎の方は階級的労働運動をつくらにいかんのとちやうか、というような内容だった三里塚斗争については実力でやるんだということと一致するんですけども、寄せ場の方針については、ただ、やっぱり煮つまらないという段階ですときます。ただ、この時期、七七年ぐらからは、釜でも山日労の方でも、一定労働相談なり、生活相談なんかが定着をします。その前の一時期は、山谷なんかの場合ですと、ピラをまくと労働者に殴られるという時期があったんですね。七六年から七七年の初めにかけては。つまり釜ヶ崎は運動が続いているわけですけど、山谷は運動を上げたわけです、ぱったり。そうすると、これまで現斗なんかのケツにくっついて頑張っていた労働者が、味方がいなくなつて手配師の意のままさせられ、マンモス交番にひとりさらされるわけです。で、やられるわけですわ。いじめられた。そうすると、またぞろ新しいメンバーが来ると、お前らまたワシらを食いものにして、困ったらいなくなるんだという感じで、かなり糾弾もされて、私なんかも相当に殴られたんですけども。ま、そういう時期を一応くぐつて、それなりに粘り強い日常活動の中で、規定力をつくってくるという時期です。

寿では、七七年の一月二二日から、八〇年の六月一日まで生活



館を実力占拠して斗ってきたわけですけども、寿日労はその生活館で、窮乏層っていうんですかね、食えない人が一〇〇人、二〇〇人、三〇〇人っている。それをその人たちといっしょに斗うっていう形の中で、生活館を一步離れた現役の労働者となかなか団結が出来ないというような時期になっていると思います。だから、結集軸をめぐっては、三里塚で一致してはいるんだけど、寄せ場で運動をどうやるかということについては、いろんな傾向があって、寿なんかはやっぱり生活館を占拠した斗いの重さの中で、なかなか就労過程っていうかな、労働運動としての基本スタイルがなかなか出来ないという困難な時期だったと思います。

寄せ場の運動としてどうなのかというと、釜が七六年七月に組合を結成して以来、寄せ場に定着して規定力を強めて、現斗・釜共斗以降の寄せ場の労働運動の生活組織を防衛して、全国の寄せ場の拠点として成長した。事実、釜ヶ崎の場合には、七七年六月でしたかね、柳井建設という大正区にある飯場で、一二人の労働者が飯場の中で焼き殺されるんですね。そういうふうな飯場での問題がある。飯場でやっぱり斗わな、いかんじゃないかということと、独自に飯場斗争に起ち上がっていくと、そういうことがあります。その中で釜ヶ崎解放会館——五階建ての解放会館を建てたり、一〇〇人乗りの勝利号を買ったりというふうなことで、ほとんど全国の寄せ場の拠点としてうち固められていく過程でした。で、寿なんかでは、労活系支援と分裂する中で、寄せ場労働者の自前の団結を求めていくという傾向が支援と縁切りするとうふうになってしまいました。寿での共同保育の試みなんかがありますが、運動上は停滞を余儀無くされている。

全体的に見て、この日雇共斗の時代の主体的な弱さを最も象徴的に示すものとして、山日労（山谷日雇労働者組合準備会）の傾向が上げられるんじゃないかと思えます。私自身がやってきたということも含めてですね。その日雇共斗の時代を僕ら、冬の時代と呼んでいるわけですけども、どんな時代だったのかを、山日労の歴史をたどって、ちょっとやってみたい。

山日労というのは、七六年一月に、活動家集団「谷の会」というのと、旧「山谷救援会」のグループが一緒になって、「S君裁判を共に闘う山谷労働者の会」ができるのが始めです。いわゆる「谷の会」というのは、山日労から除名された労働者部分と、旧東日労ですね、「東京日雇労働組合」の人たちの一部が集まって出来たもので、いわば、現斗委なり、釜共斗の運動を継承はしてないし、また、総括する力も結果的には生まれなかったということです。当時のはじめてのピラまく時に、殴られながらまいたんですけど、仲間意識、お互いに仲間じゃないかということと、S君という人が敵が見えないもんだから、すぐそばにいる敵をすぐ殴っちゃうんですね。何度もパケられますと、常習累犯といまして、ふつうの三倍の刑をだいたい受けるというふうに言われるんですけども、そういう形で一人一人の仲間の怒りが権力の弾圧の前に摘み取られていく。そういう一人一人で行きつづけている仲間の問題を皆で考えていて、日雇労働者にかけられた差別と差別を背景にした常習累犯攻撃みたいなものを打って、怒りを斗いに変えていこうじゃないかみたいなスローガンがありました。

資料にも書いてありますけど、職安でピラをまけないような状況がありました。なんとか五回目ぐらいでやっと、一緒にピラをま

いてくれる仲間が出てきたりしまして、定着をして、すると労働者  
談なんかが出てきて、次の七七年八月一五日に合宿を横浜でもちま  
して、山日労働備会というものを結成しました。この中で「あいう  
えお学校」というのをはじめます。これは識字学級です。福岡の炭  
坑の近くの被差別部落のおばちゃんたちが、あいうえお学校とい  
う識字学級をやった経験がありました、それと同じように、やはり  
貧しいが故に、あるいは家庭から放逐された故に、字を覚えていな  
い、わからない、読めない、書けないという人がいたわけで、それ  
なんかの識字をやったほうがいいかということになったのです。  
それともうひとつ、病院なんかで不当な差別を受ける、福祉の窓口  
で不当な差別を受けるということに対して闘うというように、いわ  
ゆる福祉面、生活面での斗いは相当やりました。差別に対して日雇  
労働者の権利を獲得していくということで、総合要求というのを作  
って行政なんかにつけていくというような斗いのやり方をしてい  
ました。

実際、労働者としてとことん絞りとり続けられている労働現場で、手配師との斗いという意味ではほとんど取り組めないま  
まに、労働相談の結果時々押しかけをするといいますが、押しかけ団交  
を求めていったりはした。力のない場合には支援の力をかりるとい  
うような闘いで、実際に現場斗争なりを自前でつくっていくという  
ふうにはなかなかならない。つまり、労働運動の旗印をかかげたけ  
れども、労働運動としての基本スタイルはつくれないんで、なか  
か皆が集まりにくくなって、しかも、これが一番冬の時代というよ  
うに呼ぶ根拠だと思っただけでも、非常にサークル的な、お互いの  
好みで団結するような所がありまして、よく分裂するんですね。こ

れが大きい分裂で、第一次分裂、第二次分裂というように言いま  
すけれども、合計一六回の内ゲバがあるわけです。内ゲバというか、  
殴り合いですね。包丁が飛び出したり、事務所がめちゃめちゃに潰  
れたりということが、しょっちゅうで、そのたびにごとにアパートを  
追い出されて流浪の旅を続けるというような、非常にひどい組織的  
な状況だったわけです。

これは、私なんかにも責任があるんですけども、主要には、労働  
者の自前の団結と言いながらも、労働者に本当に依拠することがな  
くて、むしろ活動家集団がフラクションをつくって、フラクション  
で考えを決めて押しつけるということに主な原因があったと思いま  
す。実際、私はそのフラクションをつくりましたし、別なフラクシ  
ョンからいじめられましたし。だから、敵が見えないうちに仲  
間内で好き嫌いで団結する、そういう労働者の状態っていうのを  
活動家が合理化してフラクション指導するというようなことの中で、  
活動が始まって三カ月目にもう分裂するんですね。不思議なもので、  
分裂してまた戻ってくるんですけどね。そんなことをやりながら、二  
回目の分裂の場合には、フラクション批判するのにその他の活動家  
がフラクションをつくって批判するという形だった。それに対して、  
労働者が指導者批判をするようになります。いわゆる文化大革命み  
たいなもんですかね。若干右翼的な文化大革命じゃないかってい  
うふうにも思ってるんですけども、それで、その批判に答えら  
れずに、指導者がトンコするというふうなスタイルです。外回り批  
判というのがあります。目先にいる手配師と斗わずに、支援を求め  
て外回りばかりやってええのかいなと、実際目の前にいる敵と斗  
わにかいかんじやないかというところで、外回り批判。した

がって、この七八年ぐらいから、山日労はそれまでめいっばい外回りしてたのを途端にやめまして、中にかかわっていく。中を中心に運動をするようになります。基本方針が決まっていなくても、あっちやってみたり、こっちやってみたり。その意味では、活動家の恣意によって労働者が動かされてしまう。労働者は、たまらん。じゃ、労働者のほうが活動家に対して、もしくは活動家が自己批判してそういう労働者の声をしっかりと汲み上げることができるといって、できないままグチグチグチグチ続けているというふうな時代です。

七八年、そういう分裂を経験しまして、大体みんなスキリしてもう一回集まるわけですね。八人ぐらいの活動家を中心になりまして、連続争議を打つわけです。これは一応現場を止めたり、それから現場に押しかけて団体交渉したり、手配師なり暴力団と闘う力がないもんで、主要には元請けを責めましてね。元請けに指導をさしてあやまらせるという、ちょっときたないというか。串刺し論と僕ら言ったんですけども、手配師がいて、孫請けがいて、下請けがいて、独占がいて、独占から指導させればいいじゃないかというふうなことです。現に労働者の前にいる手配師なり暴力団の寄せ場支配と闘わずに、現場に行って元請け責任を追求するというふうな形で、運動を連続争議として打ちます。華々しいわけですけど、なかなか労働者が集まらんわけですね。戦斗力がないというか。

その当時に、九州土建というところの争議があります。これは、一〇人乗りマイクローバスに労働者を一三人乗っけてまして、北関東自動車道でスピード出し過ぎて横転して、労働者三名が死ぬということなんです。これが新聞で曝露されまして、僕なんか一回その飯

場に入ったんですけども、飯場に入るなりしてとにかく九州土建をやらなくんというところで、山日労と山統労で競い合いになるわけですね。本当に同志的に競い合えばいいんだけど、ヤツより一日早く行ったほうがいいんじゃないかと、なんかセクシク競争なんですよね。だから、その中からおおらかな共闘なんか出てくるわけなくて、ヤツら、アノ野郎、先越しやがってとか。なんとかうまい手で、こっちのほうの旗で運動をやらうとかいう感じでやり合うもんですから、お互いにケッタオシ合いになるわけですね。ケッタオシ合いになって、組織的に山日労は弱いもんだから、すぐケンカおこして活動家はなくなるわけですよ。一二月一四日だと思えますけども、とにかく九州土建を山谷に呼ぶことになったんです、親父ですね。それで、山統労のほうから、山日労はトンコしたというふうな形の中で追求されていくわけですね。追求されるのが嫌なもんだから、越冬争いがすぐ始まるわけですけども、とにかく山統労と共闘したくないということで、山統労は玉姫公園で越冬をやるだろうから、わしらは石浜公園でやらうと。場所を変えてやることに決まったんですね。そして石浜公園のほうに山統労が来たわけですよ、玉姫公園じゃなくて。山日労のそういうやり方というのは山統労を弾圧にさらすもんだと。だから石浜公園で一緒にやらうということで、押しかけ共闘みたいなことをされました。その中で、山日労内の一緒にやらうという部分と一緒にやりたくないという部分がある。グチャグチャになりました、なかなかうまくいかずに、とにかくなだれをうって越冬争いを一緒にやるわけです。その中で内ゲバがおこっちゃうんですね。山統労―支援の赤軍（プロ革）派と山日労の

間に内ゲバがおこりまして、一晩中の内ゲバという感じですね。まわりに機動隊がいます、公園の中で二つがやり合っています、山統・プロ革の方が強かったんですね。囲まれて、ワーツと言つて殴られたり、殴り合ったりやり合ったりする。そうすると機動隊がワーツと来る。で、スクラム組んでそれをはじき出す。また、ワーツとやられるという感じで、一晩中俺なんかさらしものになりまして、大変だったんですけども、そういうふうなことでした。僕はその時、山統労だけが悪かったと思わないですね。山統・プロ革派も悪いだろうけども、山統労だけじゃないと。やっぱりそういうふうなサークルのところで本当に同志的に競り合うということじゃなくて、なんか、その、お互いに張り合う中で、結局強い者が勝つて、弱い者が負けたにすぎなくて、それはお互いに責任があるんじゃないのかというふうに思います。

そんなようなことがあります。山日労はグチャグチャになりました、最終的に七七七八年越冬のあと、全活動家がトンコするわけですね。ものの見事です。あのころ山日労が借りていた事務所が、八畳六畳六畳四畳半三畳五畳と、大きい家を借りてたわけですね。そこに活動家が誰もいないもんですから、そこが青カンの巣になるわけですよ。五〇人ぐらい寝てるわけですね、ガアッて。それで、みんな活動家がいなくなっちゃう構造の中で、俺なんか支援をやめて当該になるわけなんです。そういうふうな、かなり無責任な組織だった。なぜそうなったのか。例えば内ゲバだったら内ゲバがあつて、何故負けたのかをちゃんと総括せずにトンコするというような無責任体制がやっぱりあつた。そういう意味じゃ、そういう総括をし得ないまま、とにかく、あの時何人もパクられてましたんで、反

弾圧、あいうえお学校、労働相談、生活相談に限定して、アパートを変えまして活動を継続するというふうになります。だから磯江さんが単身決起した時も、ほとんど山日労としては為すすべもなく、組合を維持するだけの一時期を過ごしていたわけです。磯江さんの決起のあと「六・九斗争の会」というのができまして、その人たちと一緒にあって「医療と福祉を考える会」というのもつくつたりして運動をおこして、運動をなんとか持続していきます。

この山日労の時代が、だいたい終わるのが七九年一〇・三爆取弾圧を契機にしていると思います。つまり、私なんかは自分の事務所なりアパートに爆発物取締罰則違反というところで弾圧がくると全然思ってたんですけど、ところが、来ちゃうわけです。こら大変だと。第二次戦線で斗っているからといったって、権力の弾圧というのはすぐ来ると。やっぱりそういう釜共斗なり現斗なり、あるいは、爆取弾圧ということにちゃんと向い合えるところで山日労は総括しなくちゃいけないんじゃないかというようにところで、路線を変えていくのが、多分、磯江さんの六・九決起と一〇・三爆取弾圧ということだったんじゃないかと思います。

グチャグチャ長くなつたんですけども、今思うのに、山日労がどういう組織だったのか、何が問題だったのかということを考えてみますと、やっぱり現斗・釜共斗運動の到達した地平をしっかりとらるものとしなくて、旧東日労系とか、旧山自労系とかいうところでものを見ていたということが根本にあると思います。その中で、日雇労働者完全解放というスローガンを掲げていたわけですけども、これは若干右翼下層主義といえますか、現斗委や釜共斗の運動が左翼的な寄せ場主義であつたならば、そのメダルの裏返しという

ことで、右翼的な下層主義だったんじゃないか。寄せ場の運動の問題を差別問題一般に切り縮めていくような傾向があったんじゃないか。それから、寄せ場じゃ経済斗争っていうか、あるわけですねいろいろ個別斗争が。その闘い方じゃないかと思うんですね。改良をとればいい。確かに取ればいいんだけど、とるための闘い方があると。何のために改良をとるのか、改良を自己目的化したという傾向があったらと思うんです。もう一つは労働者を組織するという視点がない。寄せ場の労働者の場合には、そういう意味では組織なり家族なりというものからずーっと切り離されていますから、自分がつくった組織にもものすごく保守的になるわけですね。こういう労働者の組織に対する保守的気分迎面しまして、サークル主義なり、セクト主義を決めこんでいくというような組織運営、組織化の視点だったんじゃないか。これは、労働者を階級的に組織するという見地じゃなくて、労働者をサークル的にかこいこむというものだろうし、不断に出てくる傾向だけれども、特にその傾向は大きくあつたと思います。それから、組織原則のでたらめさというのがあると思うんですね。つまり、大衆運動を例えばこういう言い方をしたわけですね、「山統労はプロ革派だ、俺らはノンセクトだ。だから党派じゃない運動をつくるんだ」という。つまり反党派的な大衆運動をやつていて実はその反党派的なという立場がすごくセクト的であつたのに、大衆的なノンセクトづらして私物化するという傾向があつたらうというふうに思います。やはり日雇労働者がどういふふうによつたらうというふうに思っています。（そういう意味では、路線だと思つてくれども）を軸にして團結するのではなくて、好きや嫌いといつた好みで團結したり、身内意識があつたり、

適切な実践、闘いの中で訓練されていくというような教育の問題が欠けていたりというふうになる。山日労はそういう——悪いとこばっかりなんですけどね——ようなものとしてあつたんじゃないかというふうに総括をしています。この総括が、三者共斗の時代に、「六・九斗争の会」のほうからちゃんと自分の運動を総括してほしいというふうに提起をされた時に出した内容です。

そういう、どうしようもないような山日労の一時期をやつてきたわけですけれども、そういう山日労と、それから山統労と、「六・九斗争の会」で、七九年の一〇・三爆取弾圧をきっかけに三者共斗の時代が一年半ぐらい続きます。これは、まず爆取で弾圧されました。

「六・九斗争の会」の事務所および六・九斗争関係のアパート、山日労の事務所とアパートなんかガサ入れを食うわけですけれども、これで、反弾圧共斗ができるわけです、三者共斗として。そのあと、暴力団義人党の副総裁の村田という手配師がしまして、こいつに山統労の委員長のゴンちゃんが殴られるわけですね。これを三者共斗としてとり組む。そういう中で、反弾圧——個別課題別共斗という形で越冬斗争が三者共斗として取り組まれます。この時に「六・九斗争の会」の方から、前年あつた一・三石浜公園での内ゲバ問題についてしっかり総括をしてほしいという点と、やはり七〇年代後半に状況が厳しいという名のもとに、寄せ場の暴力支配と闘わないという傾向があつたんじゃないか、労働者が実際に苦しんでいるタコ部屋飯場なり、暴力飯場との闘いを軸に、闘いを組めるような運動体をつくらなくちゃいけないんじゃないかという呼びかけがありました。その総括論議が何回か行われるんですけども、実際に総括討論の場ができないまま、次の八〇年の六月になります。



葛西というところがあるんですけども、東西線に。そこで下水の処理場の工場がやられてたんですけども、そこで最上鉄筋が義人党の名を語って暴力支配して、ぶち殴られた労働者が江波戸さんという方なんです。この問題を通して、六月に前田建設―最上鉄筋斗争というのがあります。先に言っちゃいますけど。この江波戸さんという方は、僕ら中心メンバーが山村組争議でパくられ越冬の中で、権力に追いまわされて、新小岩の駅から投身自殺をせざるを得ないという形で虐殺されてしまった人なんです。

その人の問題を足がかりに三者で前田建設に押しかけまして、現場を制圧するんです。で、ここに労働者手帳というのがあって、現場でも、これは日雇全協の労働者手帳なんですけども、この五ペーシの写真のように現場を制圧する。これは恐いわけですね。暴力団もいるし、まわりに機動隊もいると。しかしながら、労働者の当然の要求である、当然の道理である暴力追放、不払賃銀一掃、そして飯場での暴力支配を許さないという道理に基づいて現場を制圧した。で、仕事をやめさせて大衆団交をやって、そこに元請けを引きずり込んで闘いを強めていくことをやります。これで七人ぐらいパくられるんですね。ここでパくられた人が全員ハンストやるわけです。以降、山谷の弾圧というのは、弾圧されると必ずハンストするという体質がで上がるんです。僕はこのときパくられなかったんですけども、弾圧されたあと負けずに二回三回と現場に押しかけて制圧する中で屈服させるわけですね。そして、被害届を撤回させて全員奪還するという闘いを組みました。この総括の中で、資本の暴力と対決する労働運動を作ろうということになった。寄せ場支配の要である暴力、これと対決しない限りだめだというような総括

が出るわけです。そういう総括をうけて、実勢暴力支配をほいままにしているタコ部屋があるんじゃないかということで、「六・九斗争の会」や山日労の有志で、川崎とかあちこちタコ部屋をさがしまわったんですね。で、ただ、今一步で暴力飯場なり、タコ部屋に對し闘いを挑めるほど方針が煮つもらないまま、山村組争議というのが始まるわけです。

この山村組争議で起訴されたのが六人なんです。その人たち一〇か月ほど中に入ってるんですけども、そこで総括論議をやるわけです。山村組は西新井にある暴力飯場で、あとでわかったんですけど、在日朝鮮人が経営する飯場です。どういふことをやったかという、浅草駅や浅草の六区で手配しまして、その暴力飯場の手配師が、白昼の路上で、トンコしたとまちがえて労働者を素裸にして帰すわけです。で、くやしいということで山日労のほうに労働相談がありまして、これを前田最上斗争の総括で、資本なり寄生層の暴力と対決する運動としてやっぱりやらなあかんということで、三者に呼びかけてやりました。飯場は暴力飯場でひどい飯場らしいと。で、暴力団ともつるみがあるらしくて、多分、武器庫もあるんじゃないかと。そういう飯場に押しかける時には一点、物を持つというところで、しっかりと武装しまして飯場に押しかけて、とにかく奴らの敵対を許さずに団体交渉になるわけですね。団交になったんだけど、怒りがあるもんですから、話している際にもうしろから物でひっぱいたり、はねとばしたりする。それで、罪名は逮捕、監禁、恐喝、傷害ですか。まるでなんかヤクザの出入りみたいな罪名で起訴されてしまうわけですけども、その総括をめぐって、獄中で論議がはじまるということです。

一方、山谷での山村組斗争の総括、他方で、釜ヶ崎では年表の方にもちょこっと書いてありますけれども、七八年中島組の飯場に対して飯場焼き打ちするわけですね。で、かなり多くの人間が弾圧されるわけですけども、委員長の山田さんなんか三年半の懲役で今年出てきたばっかりなんですけども。そういう中島組なんかの争議をやるかたわら、六月二十六日、山谷での一〇・三爆取弾圧とだいたい似てるんですけども、今、全協の議長をやっている竜なんか、ヤ一公とのやり合いの中でパクられるわけですね。この六・二六反弾圧共斗というのができる中で、旧釜共斗の中心メンバーと釜日労の部分が出合い始める。八〇年の春には「釜ヶ崎賃金斗争争議団」というのができるわけです。これが賃金斗争やる前に、暴力飯場の西幡総業に対して一〇〇名で押しかけて、西幡総業——これは山口組系だっと思ったんですけども——の暴力飯場を制圧してこの斗いに勝利する。

一方での釜ヶ崎でのそういう賃金斗争争議団の結成と西幡斗争の勝利、他方での山谷での山村組斗争の決起と敗北というようなところの総括問題をめぐりまして、八〇年の三月ぐらいから、寄せ場労働運動の一〇年間の総括を共有して、今の帝国主義者というか、支配と対決するような労働運動をつくっていかうじゃないか。例えば、現斗・釜共斗を担った人が冬の時代を批判するだけじゃなくて、なぜ現斗・釜共斗が解体したのかという総括に責任を負う。冬の時やっぱり敵としっかり闘えなかった日雇共斗の部分は、なぜ闘えなかったのかをしっかりと総括して、釜共斗・現斗の中心的なメンバーと総括を共有する、というようなところを原則的に確認しまして、「寄せ場交流会」ができる。で、「寄せ場交流会」が八〇年の九月

一日に結成、第一回交流会を持ちまして以降、八二年の六月二十七日、日雇全協創立大会までの一〇か月ぐらいの間、実に全国で一一波の全国斗争と七回の全国会議というものを持って、いわゆる一〇年間の総括視点を共有して、日雇全協を結成していくというふうになるわけです。

日雇全協の創立大会のパンフレットはもうほとんどないんですけども、こういうふうに出ています。それからいわゆる「山谷争議団」ができるというんですね、「六・九斗争の会」、山日労、仲間の会、それから、底流研、いろんなグループが集まって争議団をつくるわけです。その争議団をつくる過程のパンフレットとして「冬の時代を越える冬の斗いを」というパンフレットがあります。日雇全協が結成されるまで、とりわけ、八二年ですね、山谷では義人党の全国民声合同労働組合系の飯場との実力斗争が行われます。その中で、四・二五暴動というのがあるわけですけど、四・二五暴動については「春雷は何を撃ったのか」というパンフレットがあります。これをうけて五月二十八日に日雇全協の結成宣言集会というのを三角公園でやるんですけども、その報告パンフレットがあります。だいたいこれくらいのパンフレットがあるんです。そういう有志によって交流会が発足し、一波の全国斗争と七回の会議の中で交流会の運営原則なんかが決められて、総括を実践的に検証していくというスタイルの中で、賃金斗争なり、山谷では春期攻勢なりいうものをやりながら日雇全協の結成に到るといふことです。

で、交流会の諸原則というのと、山統労がなぜ日雇全協に入っていないのかということについて、ちょっと説明する必要があると思います。寄せ場交流会の時代は、とにかく交流会の原則というのは

三つあるんですね。全国統合を闘いとする決意、要するに団結を闘いとする決意をしっかりと持とうと。それから、これは分裂するためじゃなくて、団結するためにやるんだという基本的な構えの問題があるんだということが一つ。もう一つは一〇年間の総括内容を一致させよう。総括内容を一致させるためにはまず主体的な切開から始めなきゃいかんじゃないかと。運動の限界を人のせいにするんじゃないかと、まず自らの限界点をあばき出していきながら、討論を呼びかけて総括視点を同じくすると。そうしないと総括視点は一致しない。そのやり方を含めた一〇年間の総括視座を共有しようというのが二点め。三点めは冬の時代というふうに言っていました、闘う主体が冬の時代、敵がよく見えずに、斗えない時には内部矛盾を敵対的に扱ったりサークル的な運営になりがちだ。それがすぐセクト的な対立関係を招いたりする。そういうことのないように、内部矛盾も同志的に解決する。この三点を交流会の原則にしました。

ここで、まず、志を同じくする人から討論をはじめていくということとは筋だと思っただけでも、それに対して陰謀であるとか、まるで右翼労戦統一と同じようなやり方だというような山統労のピラが生まれて、そのピラをめぐって、何度か山統労に対するオルグをするわけです。で、こういう団結をつくらうと思っただけでも、そういうことを八一年一〇月二日に、釜日労争議団のほうから山統労に呼びかけたところ、山統労が、いわゆる山村組総括の会議の場なんですけども、一〇・九ピラというのを用意してくるわけです。もし入れないんだら公開するというようなところで、そのピラを出すか出さないかということでもめまして、それをめぐって日雇全国交流会の方で討論をしまして、一四日にオルグに行くわけ

です。で、オルグが功を奏しまして、第三回の関西大学での交流会、そこに内部矛盾を同志的に処理するという原則で主体的な切開を持ってきてほしいというところで、山統労にオブザーバー参加をしてもらったんですけども、そこでまた同じようなピラが出て、ちょっと一緒にやっていけないんじゃないかという話になる。で、越冬を前にして、一二月一四日に、何とか越冬を共にやろうじゃないかということ、こちらの提起に一応、答えて、山統労が内部文章を用意してくるわけですけども、実際、越冬の中では、用意された文章とちがうような実践が行われるというようなことで、寄せ場交流会に結果的に山統労を迎えることができなかったというようなあんばいです。

ただ、じゃ山統労ばかりが悪いかといいますと、そうでもないというか、やはり、例えば日雇全協が結成されたその年の七月四日、三里塚でプロ革派が山谷争議団に対する誹謗中傷ピラをまいたことに対して、集会の途中、その人たちを實力糾弾してきたわけです。そうすることで、三里塚の現地集會に混乱を招いたということで、日雇全協として自己批判をしまして、それは三里塚に対する取り組みの姿勢が弱かったからじゃないかということで援農なんかをやるようなことになるんですけども。やっぱりそういう日雇全協なり山谷争議団のほうでも、若干、分裂の一時期に拝跪する傾向がやっぱりあったんじゃないかと。その端的なものならわが八三年一・三の玉姫公園でのゲバルトだろうと思います。これについては団結声明とこのを出したんですけども、ぜひとも読んでいただければと思うんです。やはりその分裂の主要な原因はどこにあるにしろ、労働者の前で、闘う者同志が殴り合うということについては、労働者の前

で自己批判しないといかんという姿勢です。こういう団結の大義を握りしめていくということは、不断に行われぬ限り、空文句になると思ふんですね。そういう意味では、この一・三団結問題に関する日雇全協の評議委員会声明というのは、今でも僕らの中にある冬の時代のセクト主義の残りかすというものを克服するために、握りしめておかなければならない問題ではないかというふうに思っています。

ちょうど、今日ですね、玉姫公園使用の最後の抽選がありました。今年の夏祭り、何とか玉姫公園と一緒にやろうと思つたんですけども、なかなかそういう討論ができないまま、抽選になりました。抽選の結果八月七日から一六日まで、山谷争議団が、玉姫公園を借りることができました。で、今日はその貸付け問題をめぐって不正があったということで、抽選が終わつたあと山統労と四時間にわたつてワイノワイノになりました。行政の前でみっともない思いをしたんですけども。共斗しようといつたら、ふざけるなという話になつて、もう一度呼びかけようか、迷つてるんですけども。依然として不幸な事態は続いたままであつて、山谷での中心的な運動体としての山谷争議団が十分に力を展開しきつていないという証左ではないだろうかというふうに、自戒的にとらえています。

話が前後しちゃうんですけども、八二年の六月二七日、全協の創立大会をもちまして、今年の六月二四日、二年振りに第二回大会を行いました。創立大会は全国の寄せ場の労働運動を一つに束ねていくと、寄せ場の労働運動の全国団結ということで、非常に意味があつたと思います。以降二年間、権力の寄せ場への再編攻撃はきつくなっています。つまり七〇年代争議の封じ込めとアブレ支配という

ことで、労働者の怒りをつみとってくるといふような支配のやり方から、本格的に天皇主義右翼が寄せ場へ登場してくると。これの背後には権力の寄せ場再編攻撃があると。寄せ場のみならず、全国の日雇下層労働者が労務供給体制の再編なり産業構造の転換の中で、行革攻撃の中ですます切り捨てられ、あるいは労務報国会的な動員にさらされようとしている。創立大会で「全国寄せ場団結」を掲げた我々は、二回大会では、全国の日雇下層労働者の団結の誓として、自らをうち鍛えようというふうに方針を打ち出しました。

今のところ、白手帳労働者ですね、八二年の統計で白手労働者は全国に一四三、〇八八名いるわけですけども、その日雇労働者なんかを一つの寄り所として、全国の日雇下層労働者の団結の基礎を作つてみたらどうかというふうな試みの中で、基本組織としては各支部あるわけですけども、支部の他にはじめて全国の中央事務局みたいなをつくりました。と同時に、全国オルグ団ということでオルグ団の編成も行って、具体的に、例えば東京でしたら山谷の他に、高田馬場でも支部なり出張所をつくらうと。全国的に見ても、九州・博多や広島なんかに、具体的な新しい支部をつくつていこうというふうな動きにならうとしています。

非常に雑駁なんですけども、約一時間になつてしまったので、一応、これで終わりたいと思います。

Q1 極めて主体的な、しかも総合的な、約一〇年の歴史の経過になつていふと思うんですが、日雇共斗から三里塚・狭山を闘う全国日雇共斗会議までということ、日雇共斗以降、特に、三里

塚との関係は出ていたけれど、狭山との関係はどうなのか。根本的、基本的にはどうだったのか。山日労の話なんですけど、かなりシビアな自己切開があったと思うんですが、そんなに山日労は悪かったのかという素朴な疑問があって、どういふ良い点があったのか二点ぐらいを、聞かせてほしいと思います。

**宗村氏** 三里塚・狭山を闘う日雇共闘だったんですけども、実際は狭山斗争については当初はほとんど行われていません。全国的な七四年の一〇・三一の十何万人集会以降、狭山差別裁判糾弾斗争が下火になってくる。水平社宣言なんかの心と日雇労働者に対する差別の問題と若干ダブらせて考えたというのは、位置づけとしては弱かったんじゃないかと思います。ただ、三里塚と狭山で全国から集まる、というような点だったと思います。だから、山日労として日雇共闘を総括するとすれば、日雇労働者の全国結合を目指した点という意味では積極面があったわけですね。否定面としては、一日政治共闘というか、実際は、寄せ場の運動については、交流一般になっていくわけです。そういう意味で、個別斗争の山日労の当時は、個別斗争の総括じゃなくて、路線みたいなものを問題にする全国統合にならないかんのじゃないかというように思った。実際、七八年の一〇月から、釜ヶ崎で中島組斗争の総括なり、女性からの差別糾弾という中で、約一年間ぐらい総括討論になってるんです。とにかく釜ヶ崎のほうから、寄せ場の運動をどういふふうにやっていくのかという点について、討論せなあかんのじゃないかというふうな提起で、日雇共闘は七八年の後半からは、ほとんど、もし評価できるとしたら、総括論議が先行して

行われていたということなんじゃないかと思うんですね。

あと、山日労はそんなに悪かったのかということですけども、非常に労働者の注目があったと思うんですね。しかも窮乏層というか、いわゆる受給貧民層という人たちが、自ら受けた不当な仕打ちに対し立ち向って行くためのいろんな基礎づくりをしたと思うんです。例えば、あいうえお学校にしても、福祉窓口糾弾斗争にしても、ケタオチ病院を回わる斗争にしても、ただ、そういう取り組みがどこに向けてまとめ上げられなければならぬのかについて、根本的な路線の限界があったんじゃないかということだと思うんですね。だから争議団をつくる時に、山日労系の労働者が全部、反発するんですね。なぜかっていうと、せつかくオレらがつくった組織を、いろんな人と一緒になったらなくなっちゃうんじゃないかと。新しくできる争議団とこれまでいろんな限界を持ちながら頑張ってきた山日労と組織的に対立させてしまうというものとしてあった。そこらへんが総括のポイントなんじゃないか。いいところはいっぱいあったと思います。今でも夢に見るのは、だいたい山日労が幸せだった時なんですけど、あんまり忙しくなかったし、いろいろ仲間と話をしたり、飲んだり、自分が寄せ場を知る上でも役に立ったと思うんだけど。やっぱり、根本の誤りの所を切開しない限り、良いところも良いところとして再び役立たせることはできないんじゃないか。今の山谷争議団には欠けているところかもしれないんですが、行政に対する鋭い批判と、行政斗争を用意するような調査とか、足をきかした基礎づくりとか、材料づくりをやれたということは、教訓とすべきだろうなと思います。



**司会** 一つには、寄せ場をなぜ学ぶのかというと、そういった視点というのがないといけないと思うんだけど、なぜ寄せ場の斗いと結合していくのか、つまり寄せ場という特殊から全体を見ていく。つまり全協なんかの斗いから、今、僕らの、自分たちの斗いの教訓を見出そうとしたと思うんです。このへんで誰か話ができる方、いませんか。三多摩で合同労組運動を闘った人がちらほらみえますんで、討論提起という形で言っておきたい。

**Q2** 寄せ場労働者の側からということですが、実際、多くの都市労働者なんかと寄せ場の労働者というのは、全然違うと思うんです。そういう場合に、下層の労働者が都市労働者と連帯していくような回路というのはどうふうに考えているのか。

**宗村氏** 僕の個人の意見になっちゃうんですけど、まず、一つの象徴的な事件なんですけど、私、総評本部にいたんですよ。五年ぐらい本部にいたんですけど。皇誠会斗争が始ってパクラれる前に、反彈圧のいろんな取組みをせなあかんということで、総評本部に行っただけです。申し入れましたら、二時間待たされて、五分も話をしなかったんです。早い話が帰れないことなんです。今、個別の斗争とかいうことはあんまり頭がないんですよ。全労協とどうするかという話しか今のところ頭がないんで帰ってくれという、そういう話なんです。だから、一般に組織労働者との団結とは考えられないというふうに思う。八二年当時から斗争結合とか、斗いを共にやって、お互い斗っている中味を共有するということが

ベストだと。そういう意味では、地域的な労働者の共同斗争みたいなものを目指す必要があるんじゃないか。それは生き生きとした個別斗争をお互いに交流し合うことから始まるんじゃないかと思っっています。全労協みたいな現代版産業報国会といった動きに対して斗っている潮流というのがいくつかありまして、全国労組連なんかその一翼だろうということで、日雇全協として全国労組連に入ってるんですけども、そういう人達と団結する際にも、ちょっと違いがあるんですけども、どうもなじまないというか、例えばその日仕事にあぶれたら、自由に、あちこち動けるんですけども、本工の人たちや工場労働者の人たちはなかなか動けない。工場を単位にした運動スタイルを組んでいるので、非常に斗いの仕方が違うというところがあるんじゃないかと思うし、それが一つの客観的には混乱性を生み出すもんだと思うんですけど。帝国主義と対決する日雇全協のスローガンというのは、「帝国主義と対決する階級的労働運動の下層から推進翼へ」ということです。二回大会の場合だったらスローガンとしては、「日米帝の侵略と戦争、天皇制を頂点とする差別排外主義攻撃と対処しよう」というふうに、難しい言葉でくくってあるんですけど、そういう勢力として登場しようとする人達と地域的に結合すること、そういう労組連とかその他の争議団運動とか、戦斗的に斗っている、枠に入っていないくても僕らと団結する、つまり下層の問題を労働者の問題として真剣にとらえていこうとする人とは大いに団結していく中で、自分らも変っていきたいというふうに思っている。だから団結の回路といったら、多分、地域だろうし、やり方としては斗争結合になるだろうし、それだけじゃない、例えば内容的に

言えば、今度の全斗煥来日、天皇会谈みたいなものという政治的課題も一緒に取り組んでいくような、労働者、市民なり、戦線的な結合も目指していくことになるんじゃないかと思う。あと、いろんな回路があるんじゃないかと思うんですけどね。公式的にいうとそんな感じですよ。

**司会** あらゆる回路からの質問とか、きいてみたいことがありますか。エー、前回、前々回の討論が非常におもしろい感じでいったので思い出しておきたいと思います。一つに、三・一八の集会の時にも出たんですけども、横浜の寿の虐殺問題、それから、それに関連した形で都市の支配強化という形での権力による締めつけという問題、いいかえれば地域保安処分ということですね。あと一つ、寄せ場という問題の中で、在日朝鮮人の人が非常に多く、寄せ場という単位の中で見れば、人夫出しの業者になつてるといふ例が多い。そういう中で日韓ないし日朝の民衆の連帯というのはどうつくられてきたのかというのが出たんですけども、まだ十分につつまれていなかったと思うんです。このへんで、前二回参加された方はある程度頭の中で考えられたと思うんです。その辺で、何か考えてこられた方、お願いできませんか。

**Q3** 宇都宮病院の闘いなんか継続してやっていると思うんですけども、今の二つをその辺との関連で、少し話してください。

**宗村氏** 三月一六日に、マスコミで宇都宮問題が顕在化してくる以降、三月二九日にあの騒ぎの中で退院をさせられたYさんとい

う人が山谷にもどってこられて、宇都宮の実態を暴露したということ、四月三日に報告集会をもったわけです。七八名の仲間が討論集会に参加する。その討論集会の中で、五年もの間、宇都宮病院に同じ込められて悪虐非道をほしきままにされたHさんという人と出会う。宇都宮病院というのは、三分の二が区長同意なし市長同意になるんですか、市長同意という名のもとでの強制入院の人たち、つまり生活保護でぶち込まれた人が半分ちかくいる。

健康保険の人はほとんどいなくて、強制入院の人もあまりいない。ただ生活保護、つまり生活保護の名のもとに、病者なり患者をあいう病院にたたきこんでいく。送り込んでいた行政、福祉行政の姿が赤裸々になってきて、これに対する斗争を取り組んだ。約一か月くらい台東福祉との闘いを取り組む中で、東京都の福祉局の各福祉事務所に対する送りこみ行政に対する指導責任を追求する闘いを組みまして、五月二〇日から二八日までハンストを、長期ハンストをうったりして取り組む。一人、釜やんというのは、糖尿病の持病があったんで、四日めでダウンしたんですけどね。とにかくリレーハンストで残りの銀次がやっているハンストを支えて二八日、「宇都宮病院を告発し解体する会」という大きな枠があるんですけども、それは「関東病者有志の会」、全障連、東大赤レンガをはじめとする医療従事者、地域で保安処分攻撃と闘っている人たちが、山谷争議団なんか軸になってできた組織なんですけども、それが団体交渉を行った場で東京都の送り込み責任を認めさせるという闘いに勝利したわけです。以降、東京都はもう交渉やりたくないというようなことで、窓口は閉ざされたままです。宇都宮病院に最も東京で送り込んでと、数が多いの

は豊島西福祉事務所と新宿なんです。つまり、新宿の青カン者池袋の青カン者を宇都宮病院に福祉事務所が送り込んでいるという事実があるわけで、それに対する闘いを組もうと思ってもなかなか前にいけないというのが今の実情です。ただ、宇都宮病院を告発し解体する会というのは、五月二八日の東京都との団体交渉の闘いの一定の勝利の後で三点の運動内容を確認しています。一点は全国の実証阻止ですね。精神衛生実態調査阻止行動を担った人たちと団結しながら厚生省精神衛生課に対する病院解体の闘いを展開しようと。つまり厚生省の行政責任追求を行っていく闘いを組もうじゃないかという点が一点と、宇都宮病院に送り込んだ各地域での、もしくは、宇都宮現地での宇都宮病院糾弾斗争を広げて地域的な運動をつくっていくという点が二点め。三点めは日雇下層労働者、とりわけ寄せ場での一定の地域的な管理支配体制の強化の中で宇都宮病院みたいな隔離施設にぶち込まれている、そういう先行的な保安処分と寄せ場に現われている先行的保安処分支配と斗っていくという団結として、宇都宮病院を告発解体させる会を鍛えようという、三点を確認しているわけです。

その確認に基づいて六月一四日ぐらいに、埼玉県川口という所があるんですが、あそこはポリ公と行政がつるんでこれまで七二名の仲間を宇都宮病院に送り込んだ。しかも宇都宮病院の中には、埼玉県専用ベットというのが三五床あるというところで、若干、埼玉の実調阻止グループは、弱いということがありました。それで山谷争議団なり解体する会のほうからオルグに行きまして、六月の終わり頃、埼玉県交渉をやりました。そこで基本的には、埼玉県の送り込み行政責任を認めさせるという闘いに勝利し、一定

認めさせることができたということです。それで今、宇都宮病院解体をめぐる戦線というのは、約四つぐらいいあるんじゃないかと。山谷、東京ですね。それから埼玉、さらに東大病院の精神科医師連合の人たちの東大内部の外来一派との闘いと、宇都宮現地にあるわけですけども。一応成功しているのは東大と山谷なんですけども、埼玉が追いついてきて、この七月二十九日に、宇都宮現地で宇都宮病院徹底糾弾の現地斗争を組む、というふうにして広がっています。

一方、厚生省のほうは六月二日に解体する会として団体交渉を申し入れたところ、一時間で一〇名に限るという条件で交渉に応じるといふ解答を出してきました。こういう人数制限、時間制限は、いわば大衆的な運動が広がる前に宇都宮病院問題について厚生省側が一定の解答を出して斗争をおさめるという収集策動に他ならないということです。こういう制限付きの交渉は蹴りました。

一方で社会党が水曜協議会というのをやりまして、政府と社会党との話し合いの場を市民団体に開放しているということがあるんです。そこでの取り組みをしようじゃないかということで、この間一応、解体する会を軸に取り組んできています。ちょっと、いつになるかわからないので、社会党のほうも健保問題が忙しいんでちょっと待ってくれというようなところで、まだ具体的に政府厚生省との大衆的な斗争の局面というのは失ってません。ですから、このままいってしまうと政府厚生省の面会交通の自由問題と、弁護士専任権問題ということで、矛先をそらされてしまう。具体的には、ああいうあくどい病者を殺し、管理し、病院資本が患者を不動産と名付けて利潤追求の道具にし、その利潤は我々の血税

から出ているというような構造を撃って、宇都宮病院を解体していくためには、そうとう地域的な広がりを持った運動の拡大ということが問われているのではないだろうか。というようなところで、この間、週一回ぐらいずつ、解体する会が東大の赤レンガで行われている。当面の運動的な要は、七月二十九日の宇都宮現地の宇都宮現地の団体と、告発し解体する会の共同主催に基づく集会、行動が一つの要になっているというようなところだ。

Q4 さかのぼって七三、七四の越冬斗争について、あの頃、やっぱり、実際、テントをつくって、畳なんか敷きつめてやったみたいだけど、そういう時期のことと、最近のことと合わせて何か御意見を。感想なり、考えなりを聞かせて下さい。

風間氏 時期から言ったら、前回七二年の初めからの釜ヶ崎における釜ヶ崎共闘会議の斗いと、山谷における現地斗争委員会の話を今日はしたわけですけども、その運動の高揚の中で、七三〜七四の越冬はあったわけですよ。一方、状況的に言えば、七三年の暮れのオイルショックを受けて、すぐさま極端には仕事が減らなかつたんですけども、七四年から七五年になってからは、非常に最悪の状態になるという中で、越冬斗争の斗いというのが非常に重要な位置を占めてきた。仕事がなくなつたんで、仕事よこせ斗争あるいは仕事がないから無料宿泊所を延長せよというような斗いがある中で、重要な課題として斗われてきたという過程があるんですね。その頃、釜ヶ崎で言えば、七一年ぐらいから越冬斗争ははじまっているんだけど、公園が借りられて、七二年、七三

年、七四年とだんだん支援者も増えてきて、規模も大きくなると釜でいえば、京大あたりからテントをいっぱい借りてきて、そこに畳をひいてふとんひいて、そこで労働者と共に越冬をやりきつていくという形態がとれたわけですね。一方で宿泊所においてもこちらのメンバーが入り込んでいって、市に対して断固要求をして要求を勝ちとっていくとか。要求はさっき言った仕事の問題、無料宿泊所の延長の問題といったことが主に斗われたわけですよ。これに対して、警察、行政の側は、斗いの拠点をつぶしていくということ。通常でしたらだいたい一月に入って一〇日めぐらいには止めてたんですけども、七五年については仕事が全然ないということ。二月までずっと延長していたのに対して、フィルムにあるように、強制代執行という形で行政が出てきます。また山谷では、収容所というけど（本質的に収容所なんですけど）労働者が、行政が用意した宿泊所の中においても不法侵入というよな形で弾圧が行われた。だから斗争拠点となるようなところは全部潰していくというような敵の攻撃がより鮮明になつたわけですよ。七五年のテント村の攻防を経て、それ以降は公園に高い金網を張りめぐらして、上には忍者返し、鉄条網を張って入れないようにする。また無料宿泊所については、七六年から南港の埋め立て地にプレハブを建ててですね、そこに機動隊を常駐させて、それから、越冬実のメンバーは絶対入りこめないようなチェックをして、戒厳体制で無料宿泊所を維持するというような敵の攻撃がありました。それ以後、越冬斗争釜ヶ崎においては、非常に厳しい状況で、今、医療センターの前にふとんをひいてやってるような状態です。とくに、今、行財政改革ということで、去年の暮れ

から今年にかけては、無料宿泊所のほうもおとしあたりは、一、二〇〇から一、三〇〇名入ったんですけども、八〇〇名までに削るというような形で、ふとんなんかも全然足りなくなるというような状況になってます。山谷のほうも、玉姫は越冬に借さないうことなんだけれども、占拠して山谷のほうはやってます。

それで、宗やんなんか仕入れてきた情報によりますと、今年の越冬については、東京都のほうも、越冬対策費用を非常に切り縮めるというようなことを画策しているようです。こういう攻撃も、さっきの虐殺問題とか、宇都宮病院問題とかで出たんですけど、非常に露骨な形で、七〇年代初期あたりは、暴動対策という形でなんとか行政が鉛玉を出さないと暴動になってしまおうということ、鉛玉的政策が続けられてきたんですけども、それが、こちらが敵の設定した所を拠点にして斗いはじめると、今度は、それを全部封じ込めるといような攻撃に転換した。今、さらにいわば、行財政改革なんかを中心として、受益者負担とか、あるいはなまけ者をおかわせる必要はないといような世論攻撃なりがあった、そういう敵の支配の転換が特に、去年あたりから露骨になってきている。その中で、寿の虐殺問題も出てくる背景があるだろうし、一方では、斗う組織については、山谷におけるように天皇主義右翼が襲撃して来たり、また保安処分的な支配ということ、宇都宮病院が浮かび上がってくる。宇都宮病院なんかの問題でも、それを支えているのは、新宿なんかで露骨に反共浄化対策委員会といような形でつくって、青カン者を締め出したり。文章でも露骨に、施設に入れてもすぐ帰ってきてしまおうとか、働く意志もないとか、精神的に異常があるんだといようなことで、精

神病院へ送る必要があるといようなことを新宿の環境浄化委員会の文章なんかでも出てるわけです。

そういう敵の支配が、非常に寄せ場においては露骨に出ている。露骨といふだけでなく、オレらはそこに真に支配の本質があらわれてるんじゃないかといふことから、虐殺問題にしろ、宇都宮病院にしろ、右翼の襲撃にしろ、行財政改革の問題にしろ、全部連つてるわけで、そこから、支配を打っていくような方向性をどう打ち出せるのかといふことを十何年間模索してきたらう。

ついでに言いますと、在日朝鮮人が寄せ場、下層に多いといふことで、また直接我々を雇う人夫出しなり手配師に在日朝鮮人が多いと。そういった差別の問題なんかも、非常に入り組んであるわけで、このへんの敵の支配をどう打っていくかといふことと、それを打つための統一した味方の陣形をどうつくるのかといふ意味で、差別の問題なんかどう糸をとるときはぐしていくかといふような問題も、非常に重要な課題としてあると思うわけです。だからさっき、組織労働者の団結をどう考えているかといふ問題もあつたんですけど、そういった現在行われている支配の本質をともし見抜く中で、じゃどうやって共に敵を打っていくかといふ内容を、それぞれが、きっちり出していく。出し合っていく中でしか、僕らのほうとしては、総評労働運動なんかについてはずっと切り捨てられてきたという面と、批判といふのが強いわけで、そのへんの支配の本質を共に見抜くことから、第一歩といふのは開けてくるんじゃないかと考えています。

Q5 六月一五日のサンケイ新聞で言ってたけど、青カンした奴



にも三ノ輪の公園で水止めてる。実際的には、生きる道を断たれている。だから実際に追い出した。公園の水を止めるということ、はやっぱり、結局、死ななきゃいけないということだと。

**宗村氏** ウメちゃんが言った、東盛公園というのは、山谷のすぐそばで、山谷中心街から三〇〇mくらい離れたところなんですけども、ケタ落ちの人夫出しが、山谷に來れないような低い単価の人夫出しが、人を集めてるとこなんです。そこには二重の攻撃がかかっています。一つは地域・町内会が、自警団を組みまして、大人は公園で寝ないようにしよう、大人は昼間から酒を飲まないようにしよう、大人はケンカしないようにしようという名目で、浄化運動を実際にはじめて、排除攻撃をするんです。排除しようが、ひとまわりして自警団がいなくなったら、したたか者だから、皆戻って寝るわけで、そうするとウメちゃんがいみたい、水出さずに出れなくするというような攻撃がありまして、それは例えば、横浜での桜木町の地下街とか、新宿だけじゃなくて、山谷のすぐそばにも来ている。実際今年の三月五日には、山谷地域の住民が青カンしてたき火をしている労働者に対して、けむいのと火事になるかわからんということで殴って、結果的にその人は死んでしまった、いや殺されるというような事態もおこっています。新宿で起こっているようなことは、山谷地域にもあることだし、同じような質でかなり地域の管理支配強化の中に一つのスケープゴートみたいなもんで、浮浪者と呼ばれる失業中の日雇労働者、下層労働者が排除されていくという構造があるんじゃないかと思うんです。そこらへんをしっかりとっておかないといけない

んじゃないか。一方で、例えば、三多摩のうち、立川の天皇公園みたいな天皇の攻撃と、地域における排外主義動員みたいなものが、実はセットになってはじまっている時代なんだというように着目する必要があるんじゃないか。僕なんか三多摩に来ると、まず女の人が多くて、町がきれいで、いいなあと思いつつ、それではいけない、三多摩と山谷が結びましたら、そういう支配の巧みな地域分断と一つ一つの地域に貫徹する支配の強化みたいなのを追っていかないといけないし、そんなところであるんじゃないかと思っています。

**Q6** さっき、既成の労働組合云々という話が出たわけだが、普通労働組合の場合申請書を書いて組合員になるという形になっているが、それは基礎的なことであるわけけども、その辺で、寄せ場はどういうふうになっているのか、聞きたいんですが。そして寄せ場なり飯場なりにおける組合としての日常活動を今後、どう強化していくのかということを知りたい。

**竜さん** 組合員という確定のし方については、いろいろな試みはなされたんです。例えばオレの場合は、釜ヶ崎が長く、釜ヶ崎の例にしますけど、全港湾の建設支部西成分会は、毎朝センターで組合員証を入会費の一〇〇円（今は二〇〇円）出して、名前書いて登録したら、組合員になる。何千人と集まるんだけど、実際にはほとんど機能しない。一〇〇円出して組合員になるんだけど、組合の大会が開かれるわけじゃないし、実質的に何かに闘いの場に参加していくというのが、次の釜共斗の時代にはだいたい

釜共斗の資金になった。自覚的に斗いに参加して、オレは釜共斗なんだという人が、だいたい組織員となった。あと釜日労になってからは、かなりバラまいたらしいけど、組合証をね。やっぱり流動性がほしいし、組合員ゆうて組合証を発行したら、何千枚とはけるんだけど、実体としてはそうはならないということで、現在全協といったら、活動家集団的な、何ヶ月何年活動する人間が組織委員になるというような状態なんですよ。それで、それをなんとか突破する必要があるだろうとは考えています。

飯場なりの争議、それから釜ヶ崎はわりと定着していて今年は山谷でもやったんだけど、春季斗争ですね。それから秋にかけて春季の獲得した地平を防衛して、秋季斗争（どういう形になるかは具体的戦術はこれから練るんですけども）をやっていくというようなことを考えていて、あとそういった日常活動と全斗喚来日の問題とかそういった政治的な課題、それから夏祭り、越冬斗争、そういったものを、今後はもうちょっとちゃんと一年のスケジュールと方針（計画をだいたいやりっぱなしが多いんですけど）をもっと少し中期的な獲得目標とか、長期な獲得目標とかいうような形で設定して、地道にかつ大胆にやっていくんじゃないかというところが、今のところですよ。

**宗村氏** ついでに山谷の状況を加えますと、大阪の場合だと釜ヶ崎が集中拠点ですね。奴らにとってもワシらにとっても集中拠点は。東京の場合には、いくつか寄せ場があります。大きな所では高田馬場、川崎の原っぱ、高橋ですね、深川の。これ三つ。その他、最近伸びた所では、千葉駅とか、青カン者の多

い新宿、池袋、渋谷。寄せ場が分散しているわけです。したがって、山谷ばかりでやっていると手配師は馬場に逃げたり、原っぱに逃げたり、駅手配に逃げたり、新聞広告に逃げたり、逃げられちゃうわけです。そうすると、逃げたということが労働者の目の前に明らかになると、「奴らが騒ぐから仕事がなくなる」という権力や資本なんかのキャンペーンに労働者がのる可能性がある。ということ、周辺の寄せ場にも波及力を強めるというようなところで、山谷争議団としては、この一年考えてみたらと思っただけで、今、それを実行に移しつつある。定例情宣から始まるんじゃないか。馬場には最初から支部をつくれるという意見もあります。そういう取り組みをしようじゃないかというふうに思っています。

**Q7** 第二回日雇全協総会の話を知りたい。報告と、これからの運動方針について。

**竜さん** 簡単に言えば、二回大会で、前面に出た方針というのは、日雇全協の全国組織としての機能を各支部、今、四つの寄せ場の拠点を強化しつつ全国組織としての機能をちゃんとやっていくというのがある。もう一つはさっき、宗さんのほうから出たけども、例えば山谷なら山谷周辺の他の寄せ場を含めて、福岡とか、そういった他の全国の寄せ場なり、白手帳労働者の組織化に着手しようというのが、だいたいこの二つが基本的な方針で、あとは日雇全協として、労働者をどう組織していくかという意味で、もっと大衆化を進めるということと、単に人を集めるということ

なく、そこでどうやって階級形成を成しとげるかというような問題を中心として打ち出したということです。

**宗村氏** 第一回大会になかった項目ができた。下層兄弟との団結というのが考えている。というのは、去年、愛知の岩倉にあるキャバレー、グラッド・ドミンゴという所で、女性労働者の首切りがありまして、それを全国で支えているというものでした。あと多摩にある彰宏土建という飯場が倒産した時に、そこで出稼ぎの労働者と出会う。大宮駅手配の労働者と出会う。千葉で、その飯場にかよう労働者と出会う。千葉の下層内土方の仲間と会ういうようなことがいろいろある。釜でも、京都の東九条や七条の職安近辺では、在日の人達や被差別部落出身の人たちがたくさんいるということ、そこにアジトをつくることも含めて、下層兄弟との団結というところを、二年間の総括、斗いの経過の中でとらえ返していこうじゃないかというような試みを考えている。特徴的には、二回大会は、各支部総括が出されなまま、全国組織としての総括をやっている、実は。支部総括としてきちんとやられたというのは、多分、釜ぐらい。去年の一〇月まで、ということ各支部の取り組みを総括して大会にまとめ上げていくというスタイルを、三回大会にはつくらんといかんだろう。今、竜さんが言ったように、年次計画を立てるといって、そういう支部と全国の有機的な関連をもたしていこうじゃないか、というような所が総括としてでてくる。

**竜さん** 始めての人なんかは、急にわかれといってもわからない

と思うんだけど、特に青カンしてる労働者なんかは、現象だけ見たら、何で働きもせずにグタグタしてるんだとか、昼間から酒飲んでだらしないとかいう気持ち、一般的に起こると思うんだけど、その背景に何があるかということを見ないと、どうしてもさっきの新宿の話のように、あるいは三ノ輪の公園のように、そういったところのせられていってしまうというように危険性があるわけで。その辺、昔は大体寄せ場労働者はこわいという一般的な見方が強かったんだけど、今は非常に年配者が多くなったということと仕事がなくなったということが大きいんだけど、働きもせずにブラブラ青カンしてるというような見方が強くなって、それへの攻撃が強まっているわけね。その辺、やっぱり、もうちょっとちゃんと日本の時代の流れみたいなところをふまえた上で背景を見ていくと、寄せ場労働者のこともわかってくるんじゃないかというふうに思います。

**司会** いろんな形で差別分断は進行しています。例えば、こないだ非常に印象的だったのは、都内の公園でロープが張ってあって、オートバイに乗っていた高校生が首をかけて死んでしまうと。いう事件があった。それと同時に、それを心理的に支えている状態というのが生み出されているんじゃないかと思うんですね。例えば新聞なんかのキャンペーンでも、どっちかっていうと殺す気持ちかわかるみたいな感じで書かれている。そういうものを打ちやぶっていかないと、僕らに未来はないじゃないかと思えます。そういう意味で、寄せ場での斗いというのは、僕らの身近かなものに密接につながってきていると思います。